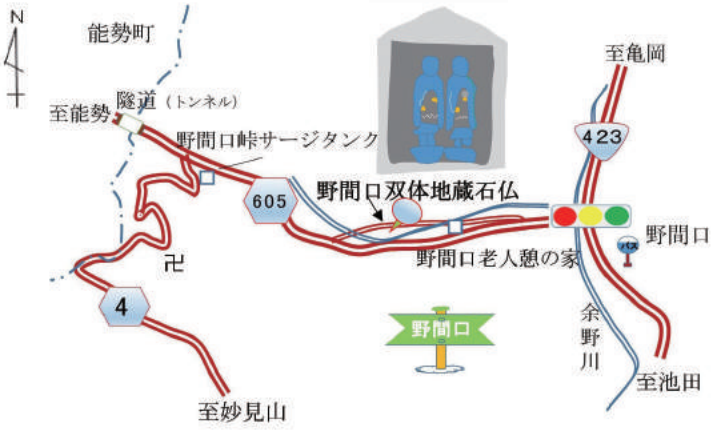
野間口双体地蔵石仏

分類　地蔵石仏
年代　江戸時代と推定
所在　野間口西垣内

この双体地蔵は高さ四五㎝、幅三五㎝、砂岩質の頭部山形の板碑で、方形の龕（がん）の中に像高二六㎝の地蔵立像が二体彫られている。共に左手に宝珠を捧げ、右手は前に垂らして与願印を示している。江戸時代のもので、他の地方では多く見かけるが、本町ではあまり見かけないものである。

一般に地蔵菩薩は左手に宝珠、右手に錫杖を持ったものが多いが、この板碑のように錫杖を持たない例もある。右手を垂らし与願印を示し、左手を胸前に挙げて宝珠を持つ地蔵立像は、最も早くあらわれた古式像である。後になって錫杖を持つ地蔵があらわれるが、この古式像は持錫宝珠の地蔵と並んで後々まで造られている。

二体を並べるのは、願主が夫婦で比翼連理の考えによるものと思われるが、これによって連想されるのは、本町川尻中の谷（個人宅内）の路傍に見られる五輪塔二基を並べて刻んだ板碑である。



野間口妙見山の鳥居

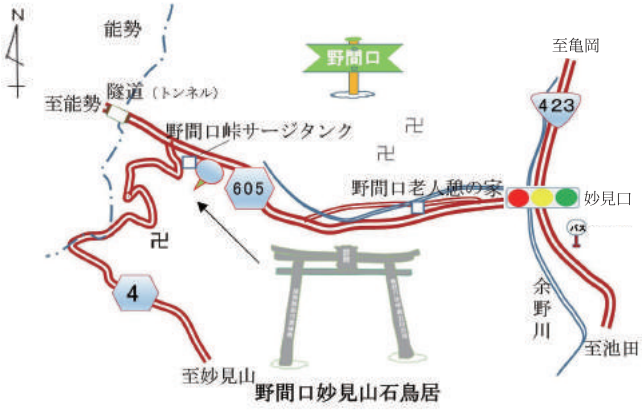
分類　鳥居
年代　安政六年（一八五九）
所在　野間口

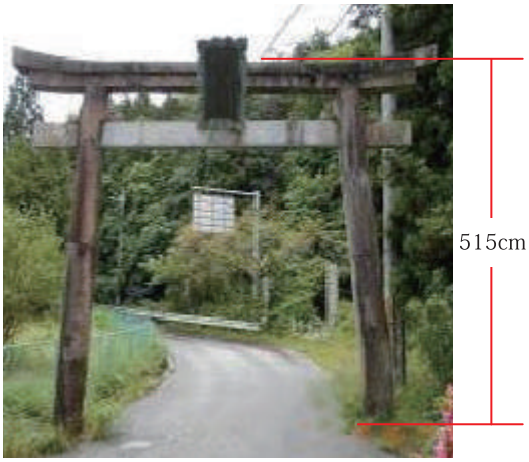
京、野間口側より妙見山参詣道の石の鳥居である。

能勢氏第三十代頼直が建立したものである。正面左側に能勢筑前守源頼直建立の刻銘がある。右側には安政六甲寅年五月吉祥日と刻まれている。

能勢の字が一部欠損するが、十分に読み下し可能である。当時、頼直の代には、江戸下町本所下屋敷を賜っている。江戸屋敷に妙見大菩薩の分体を祀り、多くの信仰を集めることになる。親子鷹でおなじみの勝小吉と勝海舟親子も信仰者であった。今も妙見山の東京別院として賑わっている。

妙見大菩薩の紋章として使われている矢筈は、能勢氏の家紋でもある。開運殿（本殿）は慶長十年（一六〇五）能勢頼次公によって草創され、天明七年（一七八七）能勢頼直公の本願によって再建され、明治二十八年に大改修されている。内陣の御宮殿には開運の守護神である北辰妙見大菩薩が祀られている。





（右柱）安政六年甲寅五月吉日祥日
（左柱）能勢筑前守源頼直建立

野間口妙見山の道標

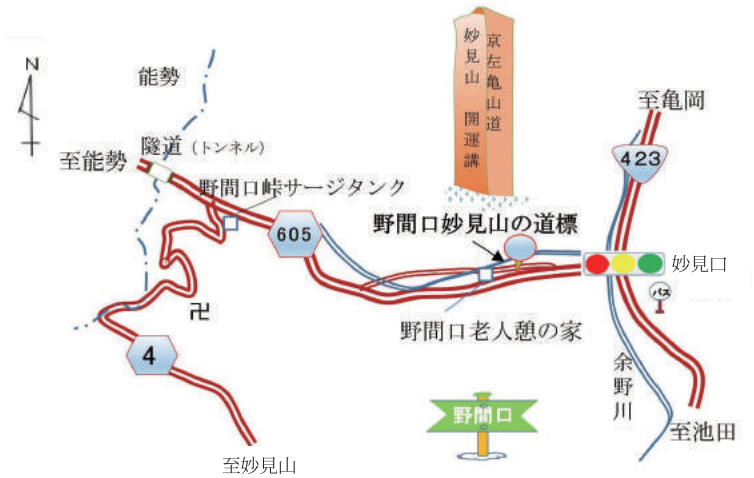
分類　道標
年代　文政十一年（一八二八）
所在　野間口下の谷

妙見大菩薩を祀る妙見宮は能勢の妙見山頂にあり、近世以来諸人の信仰を集めた。当初は領主の能勢氏の祈願所ともされたが、次第に庶民の信仰をあつめるようになり、一八世紀後半から参詣者が増加した。各地で参詣のための講が結成され、能勢妙見の名は全国的に知られるようになった。

野間口の道標は、文政十一年（一八二八）、京都の開運講と呼ばれる講社によって建てられている。高さ約一七〇cm、横幅約三七cmの角柱である。正面の刻銘から、右が妙見山であることを示す。

左面に

「摂州能勢郡能間庄　鷹ケ峯岩戸大千代講和歌山儀兵衛　御山江十八丁」

と記し、御山（妙見山）へは十八丁の地点であること、また、開運講の代表者が鷹ケ峯村（山城国愛宕郡）大千代講の和歌山儀兵衛であることを示す。右面に「左　京亀山道　世話人綸子屋平兵衛（ほか四人略）」、裏面に「文政十一歳戊子九月吉日立之　切畑村　石工重郎」と記されている。亀山とは現在の亀岡のこと、世話人とは講社の世話や参詣人の案内者のことである。

（右面）左　京亀山道　世話人綸子屋平兵衛
（正面）右　妙見山　開運講
（左面）摂州能勢郡能間庄　鷹ケ峯岩戸大千代講和歌山儀兵衛　御山江十八丁
（裏面）文政十一歳戊子九月吉日立之　切畑村　石工重郎